



漢字文化の継承のためさまざまな問題が話し合われたフォーラム（京都市中京区）

漢字文化の全面的な継承・発展を目指すオープン・フォーラム「漢字文化の今」がこのほど、京都市中京区の京都新聞文化ホールで開かれた。最近増えているカタカナ地名や人名用漢字の追加など、さまざまな問題点について、漢字研究の専門家らが熱い議論を繰り広げ、漢字の今を見つめ直した。

（文化報道部 梟 豊）

## 京都

# 時のまなざし

### 「今」みつめ京でフォーラム

京大は、東アジア共通の文化である漢字をとらえ直す研究プロジェクトを五年計画で取り組んでいる。フォーラムは、京大21世紀COE「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」と京都新聞社が漢字について広く考えてもらう狙いで開催したもので、今回が二回目。

フォーラムでは、まず平成の大合併でカタカナやひらがなの行政地名が

い。場所も空港とも離れている。行政地名にふさわしくない」と、安易な命名に警鐘を鳴らした。

一方、人名漢字についても議論が活発だった。法務省は、使用漢字の拡大大要を受け、二〇〇四年九月、人名漢字を四百八十八字追加、常用漢字千九百四十五字に人名用漢字九百八十三字を加えた二千九百二十八字

がイメージ中心の名付けが目立つようになった」と現代の命名を巡る漢字の在りようの変化を指摘した。

また、韓国の漢字事情について、京大人文科学研究所の李昇燁助手が報告した。人名に使用できる漢字は、一九九〇年の戸籍法改正により初めて制限された。その後、段階的に拡大し、二〇〇一年の規則改正で四千八百七十九字となった。しかし、人名漢字の関心とは逆に、新聞や雑誌でもハングル表記がほとんどで一般的には漢字離れが進んでいるという。「大学生の知っている漢字は二、三百字程度。使わなから忘れる。戸籍もハングルのみで漢字を登録しない人もいる」と、漢字文化圏でありながら、「読み」中心となっている実態を明らかにした。

所の高田時雄教授は「大学生の漢字能力の低下を感じる一方、一般にはコンピューターが普及し漢字を使う頻度が増している。日常使用する漢字数も学校で習う数を格段に上回っている。漢字にかかわる政策をもっと真剣に考えなければいけない」と指摘した。

# 漢字 変化する 在りよう 探る

が名前に使えるようになった。

その人名漢字の改訂審議に参加した国立国語研究所主任研究員の笹原宏之氏は、全国の法務局に寄せられた要望の実態調査から、漢字の捉え方が変化すると話す。「漫画の主人公と同じ名前を求めたり、にんべんに愛と書いてほのかと読ませるなど、漢字本来の意味が軽視され、形や音から選

番号が割り振られているが、異字体にも同じコードが割り振られているため、使用するコンピューターによっては違う字体が表示される恐れがある」と問題点をあげた。

JISコードは経産省だが、地名、人名は別の省庁が所轄している。字形の統一など今後の解決が迫られると強調した。

また京大人文科学研究